

経営発展支援事業を活用した先輩農業者のすがた(初期投資【機械や施設を購入】されたみなさん)

【経営発展支援事業】

採択年度	営農類型	水田	野菜	果樹	酪農
令和5年(2024年)		京都府 山本 義久 さん			
令和4年(2023年)		山形県 秋場 淳克 さん 茨城県 赤塚 啓希 さん	青森県 匿名希望 さん 岩手県 中村 知宏・愛 さん 宮城県 (株)Punks Farmer 群馬県 匿名希望 さん 埼玉県 萩原 直人 さん 新潟県 本間 浩司 さん 岐阜県 田中 利昌 さん 愛知県 伊藤 和人 さん 三重県 津田 彰史 さん 滋賀県 満嶋 敏行 さん 兵庫県 祐尾 智紗美 さん 奈良県 山本 敏貴 さん 島根県 匿名希望 さん 山口県 匿名希望 さん 徳島県 川嶋 雄一・恵 さん 愛媛県 松本 昌人 さん 高知県 西村 郁弥 さん 福岡県 松本 恭平 さん 佐賀県 匿名希望 さん 長崎県 匿名希望 さん 熊本県 福本 巧 さん 大分県 匿名希望 さん 宮崎県 中島 笑里 さん	山形県 高橋 善祐・未来 さん 栃木県 中村 麻衣 さん 長野県 山岸 さん 静岡県 稲木 遊野 さん 石川県 大石 衛 さん 和歌山県 畑 篤志 さん 広島県 農事組合法人にじいろファーム	北海道 河合 佑奈・聖 さん

本間 浩司さん (44歳)

(営農類型：施設野菜)

新規就農を志した経緯・背景

昔からいちご農家である親の手伝いをしていて、いずれ自分で美味しいいちごを消費者に届けたいと思っていた。民間企業に22年勤めていたが、父親の高齢化により農作業を手伝うことが増え、父親も引退を考え始めるようになったため、就農を決意。本格的な経営開始前に親元で栽培技術を学び、令和4年に経営を継承、経営開始。

導入した機械・施設等

- ・パイプハウス 1棟
- ・いちご高設栽培装置
- ・暖房機
- ・その他附帯設備



初期投資を行う上で留意したポイント

- ・経営を継承にあたって労働力が増えるため、更なる経営の発展に向けてハウスを増棟することとした。
- ・資材が高騰する中、投資の効果が最も発揮される内容となるように父親、JAと相談した中で事業計画を作成した。

導入の効果

- ・ハウスの増棟により、既存ハウス含め全体的な収量・所得の増加が期待される。
- ・経営を継承したことにより、経営者としての意識が芽生え、日々の生育管理に加え、経営面についても意識するようになった。

就農の状況と今後

就農準備 (R3~R4)

- ・父親の経営を手伝いながら、栽培技術を習得。
- ・JA、市へ活用可能な補助金について相談。
- ・認定新規就農者となるために、JA、市、農業委員会、県普及指導センターとワンストップ相談のうえ、青年等就農計画を作成。

現在 (就農2年目)

- いちご25.92a (ハウス7棟)
他メロン、苺苗、ネギなど
- ・事業でハウスを1棟 (4.05a) 増設し、父親の経営規模から拡大。
 - ・父親中心に指導や助言を受けながら、R4から農業経営を開始。

今後の目標 (就農5年後)

- いちご29.97a (ハウス8棟)
他メロン、苺苗、ネギなど
- ・さらなる所得向上、面積拡大等に向けた取組 (ハウス増設)
 - ・父親の栽培技術をすべて習得し、農業収入2,000万円を目指す。

大石 衛さん (48歳)

(営農類型：果樹)

新規就農を志した経緯・背景

地元の農業協同組合に勤務する傍らぶどう農家である親の手伝いをしており、いずれ自分が親のぶどう園を継ぐと思っていた。親が高齢により農業経営を移譲したい意向であることから就農を決意。令和4年に経営を継承、経営開始。

導入した機械・施設等

- ・パイプハウス（単棟）2棟
- ・スピードスプレーヤー
- ・棚下作業台車



初期投資を行う上で留意したポイント

- ・前職で培った農業経営アドバイザーの知識を活かし、計画的に安定した経営を目指すために収支計画を作成した。
- ・繁忙期でも休日確保できるよう、品種構成、作型を検討し、加温作型のための単棟ハウス2棟の導入を決めた。

導入の効果

- ・背負い動力噴霧器からスピードスプレーヤーによる防除に替えたことで、防除に係る作業時間を短縮できた。
- ・デラウェアを減らし、大粒品種を増やすことでジベレリン処理や収穫した果房の調整、箱詰時間が削減する見込み。
- ・単棟ハウスを増設することにより、大粒品種の加温作型を開始し、作期の分散、盆前の高単価果実販売が可能となる見込み。

就農の状況と今後

就農準備（H30～R3）

JA・市・県の農業普及指導員が連携して補助金・資金の活用について支援！

現在（就農2年目）

今後の目標（就農5年後）

- ・農業協同組合職員として働きながら親のぶどう栽培を手伝い、栽培技術を勉強。
- ・前職勤務時に就農に役立つ資格を取得
- ・JAや普及員から営農計画等に関するアドバイスを受け、青年等就農計画を作成。

ぶどう80a
（連棟ハウス18棟、単棟ハウス2棟）

- ・令和4年度に農業経営を開始。
- ・事業で単棟ハウス2棟を増設し加温作型を開始（苗木新植）。
- ・農業所得は約345万円。

ぶどう80a
（連棟ハウス18棟、単棟ハウス2棟）

- ・デラウェアを減らし、大粒ぶどうの割合を増やす。
- ・加温作型のぶどうが収穫可能となる。
- ・農業所得の目標は800万円。

田中 利昌 さん 50歳 (※就農時49歳)

(営農類型：施設野菜)

新規就農を志した経緯・背景

両親が兼業農家で、体を動かして作物を作ることに興味があり、安全でおいしい食物を自身の手で作りたいと考え農業を始めようと考えた。また、両親が農地を持っており、それを有効に活用したいと思った。自身の仕事のキャリアの中では小売業の責任者であった期間が長く、作業の計画を立て、作業量を見積り、効率よく実施できるよう準備することが得意で、農業はそういったスキルを活かせると考えた。

導入した機械・施設等

- ミスト噴霧設備一式
- 循環扇一式



初期投資を行う上で留意したポイント

- 費用対効果が充分か検討した。
- 気温・湿度等は自動で計測し、ビニールハウス内が作物に最適な環境となるよう制御できる仕組みを導入した。

導入の効果

- 乾燥する時期にも光合成に適した飽差（気温と湿度のバランス）を維持することで、就農2年目の目標9,000kgを上回る、10,400kgもの生産量を確保することができた。
- 空気を定時に攪拌することで過湿による病害を防ぐことができた。

就農の状況と今後

就農準備（R3～R4）

- JA全農岐阜いちご新規就農者研修施設で栽培・経営技術を取得。
- 研修先や県など関係機関からアドバイスを受け、青年等就農計画を作成。



現在（就農2年目）

施設野菜（いちご）18a
生産量10,400kg

- 青年等就農計画のとおり就農。
- 作物の様子をよく観察し、迅速に対処することを心がけている。



今後の目標（就農5年後）

施設野菜（いちご）18a
生産量12,000kg

- 施肥、環境制御について日々記録、分析し収量の維持・増加に向けた改善を行っていく。
- 効率向上に資する設備機器の導入を検討していく。

伊藤 和人さん (34歳)

(営農類型：露地野菜)

新規就農を志した経緯・背景

- ・農業は、生まれ育った地域に根差し、「食」という人が生きる土台を支える職業だと思っていた。教職に就き、子供たちと触れ合う中で教育と日本の未来について考えるようになり、後継者不足や農地の荒廃、食の安全性等、教育以前に人を支える食の基盤を作っていくことがこれからの人と日本の未来を守り作り上げていくことに繋がると考えるようになり、両親が営む農業を継承することを決めた。

導入した機械・施設等

- ・キャベツ貯蔵用冷蔵施設 8坪等



初期投資を行う上で留意したポイント

- ・近年顕著な不順な天候に対処するとともに、契約先の細かな要望に積極的に応えられる環境を整える。
- ・労働力に限りのある家族経営での生産量を踏まえ、貯蔵施設の規模を検討。出荷率を上げることにより収益を増やす。

導入の効果

- ・キャベツ貯蔵用冷蔵施設の導入により、収穫したキャベツを一定期間貯蔵することで、出荷期間の延長が可能となり、契約量を増やすことができた。
- ・天候に左右されることなく、計画的な出荷が可能となり、労働環境の改善に繋がった。

就農の状況と今後

就農準備 (H30~R4)

- ・農業経営士でもある親元に就農し、農業に従事しながら、栽培技術、販売、経理等の知識を親から学ぶ。
- ・市、県のサポートを受けて青年等就農計画を作成。

現在 (就農1年目)

- ・親の農業経営を継承。
- ・キャベツ
経営面積 470a
販売量 366t
- ・キャベツ貯蔵用冷蔵施設を導入し、販路拡大に取り組む。

今後の目標 (就農5年後)

- ・キャベツ
経営面積 470a
販売量 400t
- ・契約キャベツを経営の柱に捉えた確実販売による安定的な農業経営を確立する。

新規就農を志した経緯・背景

沖縄のマango農園でお手伝いをしたことがきっかけで、農業の魅力を知り、前職でのコロナ禍の影響もあり思い切って地元に戻る決心をした。観光農園等での雇用型就農を志すも条件に合った就農先が見つからず悩んでいたが、同じ伊賀市でイチゴの観光農園に取り組む農業者と出会い、研修を受けることに。研修先の紹介で手ごろな農地が見つかり、独立自営に至った。

導入した機械・施設等

- ・加温機 2台
- ・炭酸ガス発生装置 2基
- ・いちご集出荷施設及び農機具格納庫 1棟 等



初期投資を行う上で留意したポイント

- ・必要な施設等を可能な限り整備することで、目標の所得をあげられるように考えた。
- ・パイプハウスや高設栽培システム等の設備は借入金を活用して導入し、返済が無理なくできるよう規模や精度等を精査し、事業費の縮小に努めた。

導入の効果

必要な機械と設備は、研修先の先輩農業者と普及センターのアドバイスを受けて導入した。

伊賀市は県内の他の地域に比べて日照量が少なく、気温も低いので、特に加温機と炭酸ガス発生装置の導入は、収量の確保につながっている。

就農の状況と今後

就農準備 (R3.4月～R4.6月)

- ・令和3年6月に研修開始。
- ・イチゴの育苗、栽培管理方法を先進地農家で習得。
- ・令和3年12月に農地の利用権設定。
- ・令和4年3月に青年等就農計画の認定を受ける。
- ・令和4年7月に就農。

現在 (就農1年目)

高設栽培イチゴ 17a
 水稲 (作業受託) 36a
 生産量 (イチゴ) 2,265kg

- ・融資等でハウスを2棟新設。
- ・水田用の農業機械は無償で借受。

今後の目標 (就農5年後)

高設栽培イチゴ 17a
 水稲 (作業受託) 60a
 生産量 (イチゴ) 5,950kg

- ・高品質イチゴの栽培。
- ・贈答用を専門とする青果店等への販路拡大。

満嶋 敏行 さん (42歳)

(営農類型：施設野菜)

新規就農を志した経緯・背景

高校卒業後、一般企業に20年間勤めていたが、自身の子どもがいちごをおいしそうに食べる姿を見て、農業に興味を持ち、就農を決意。その後、農業法人で1年間知識・経験を積み、R4年度に経営を開始。

導入した機械・施設等

- パイプハウス 5棟



初期投資を行う上で留意したポイント

- 将来を見据え、経営を安定させるには初期投資をしっかりと行うことが重要だと考えた。
- 理想とする経営像を実現するために必要な初期投資を近隣地域の事例等から分析し、普及員と積極的に意見交換を図りながら機械・施設の導入を検討した。

導入の効果

- パイプハウスを5棟新設することで同一時期に複数品種の栽培が可能となり、他のいちご農家との差別化を図ることができた。
- 高強度ハウスの新設により、自然災害に対し安心して就農することができた。

就農の状況と今後

就農準備 (R3~R4)

- 農業法人で研修を受け、独立への道を模索する。
- 関係機関と設備投資内容や補助事業について意見交換を行いながら営農計画を作成。



現在 (就農1年目)

- いちご20a (ハウス5棟)
- 新品種みおしずくの栽培に取り組み、新しいことに積極的にチャレンジしている。



今後の目標 (就農5年後)

- ぶれずに品質を高めることにこだわり、更なる規模拡大を目指す。
- SNSや口コミによる集客で県内有数の観光型いちご農園を作り上げる。

山本 義久 さん (47歳)

(営農類型：水田)

新規就農を志した経緯・背景

親の農業を手伝い深く関わる中で、地域内での関わりも通じ、地域内の高齢化による後継者不足や担い手不足を肌で感じ、危機感を覚えたことで、地域に根付いた農業を行い、地域を守っていききたいと強く感じ「農業を基軸にした地域づくり」の取り組みに参加することで、地域のためにも地域内の農地を守るため就農を決意した。

導入した機械・施設等

コンバイン
農機具格納庫



初期投資を行う上で留意したポイント

- ・就農計画を作成する中で、将来を見据えた初期投資を行う必要があると考え、必要な機械・施設を導入した。
- ・今後の目標の経営規模を見据えた機械・施設を導入するため、機械・施設の選定にあたっては、地域の先輩農家から助言をもらいながら検討した。

導入の効果

- ・コンバインの導入により、経営面積の拡大に対応可能となった。
- ・段階的に経営面積を拡大し、農業所得向上を図る。

就農の状況と今後

就農準備 (R3~5)

- ・地域の農家のもとで2年間水稻栽培や農機具の取り扱いや販路等々研修を受けた。
- ・地域との関わりの中で農地の集積を進めた。

現在 (就農1年目)

コシヒカリ 460a
京の輝き 190a

- ・経営発展支援事業でコンバインと農機具格納庫を導入。
- ・水稻【京の輝き】を新たに導入し、経営規模拡大を図る。
- ・地域内の農地の受け手となり、効率的な集積を行っている。

今後の目標 (就農5年後)

コシヒカリ 880a
京の輝き 320a

- ・空き農地を積極的に引き受け、地域の担い手として経営を確立させる。

祐尾 智紗美 さん (40歳)

(営農類型：露地野菜)

新規就農を志した経緯・背景

約10年間、世界を放浪した経験があり、23歳の時オーストラリアで出会った野菜農家で働いたことから農業への思いが芽生える。現地をよく開かれるファーマーズマーケットで、手がけた野菜や果物を誇らしげに語る有機農家さんに触れる中、人の暮らしや食の本当の豊かさを実感し、有機農業を通じて「豊かな暮らしのお裾分けがしたい」と就農を決意。

導入した機械・施設等

- パイプハウス (1.8a)
- ハンマーナイフモア (刈幅800mm)
- 保冷库 内容量 (1201ℓ) 2台
- 管理機・マルチャー (5.0馬力)
- 掘り取り機 (掘取幅110cm)



初期投資を行う上で留意したポイント

- 有機農業および少量多品目経営といった営農形態に適した機械や施設、必要な能力については、親方農家や普及センターからのアドバイスを受けながら選定。

導入の効果

有機農業の大変さの1つが雑草管理。ハンマーナイフモアを導入することで草刈りが格段に楽になるとともに、雑草を細かく粉碎してくれるため、そのまますき込むことも可能に。

また雑草抑制に必要なマルチ張りもマルチャーを導入することで作業効率が格段にUP！

就農の状況と今後

就農準備 (R1~3)

- 令和元年、インターネット等で研修先を探し、直接兵庫県内の有機農家に申し込み、研修開始。
- 週4~6日のペースで通いながら、自分の畑で復習。
- 親方農家での研修と同時に、三重県の有機農家で堆肥づくりのセミナーを受講。

現在 (就農2年目)

- 有機野菜 (60種類以上) 60a
- 水稲・黒大豆も有機栽培開始
- 農業を営む実家の近隣に「農場なつめやし」を立ち上げ独立。
- 地域の方に向けた家庭用の野菜セットを中心に、地元の直売所出荷や飲食店との取引にも力を入れる。

今後の目標 (就農5年後)

- 有機野菜80a、有機水稲50a、有機黒大豆20a
- 新鮮な旬の野菜をイベント出店などで販売することでファンを獲得し、野菜セットの定期販売を行うことで安定した販売へとつなげる。
- 安全安心で、美味しい作り手の見える野菜を通して地域を盛り上げたい。

山本 敏貴さん (34歳)

(営農類型：施設野菜)

新規就農を志した経緯・背景

親が柿の専業農家であるため昔から農業は身近ではあったが、就農しようとは考えていなかった。大学卒業後に民間企業に8年勤めていたが、家族との時間を大切にしたいと思い退社。家業の手伝いをする中で、「農業はやり方次第で儲かる！！」と実感し就農を決意。奈良県の研修制度を活用し、令和4年に親とは別経営体として経営開始。

導入した機械・施設等

- ・加温機
- ・光合成促進機
- ・養液灌水装置
- ・換気装置



初期投資を行う上で留意したポイント

- ・生産性向上と作業省力化を最優先としたため、投資額は大きくなるが施設や導入機器のスペックについて妥協はしなかった。
- ・鋼材価格の高騰により、パイプハウスや高設ベンチの金額が以前に比べてかなり高額になっており、投資額を抑えるため、ハウス建設を自分で行った。

導入の効果

- ・ハウス内環境（温度、湿度、炭酸ガス濃度等）を最適化することで、収量の増加と病害虫の発生抑制等につながった。
- ・高品質なイチゴ生産ができたことで販路が拡大し、計画以上の売上を達成できた。

就農の状況と今後

就農準備 (R3~R4)

- ・奈良県の研修制度を活用し、先進農家の下で研修開始。
(R3年7月~R4年6月)
- ・円滑に就農できるよう、融資や農地貸借の手続きなど、計画的に準備を進めた。
- ・令和4年7月に経営開始。

現在 (就農2年目)

- ・イチゴ18a (高設)
- ・農業収入は約3,500万円。
(経営開始資金を除く)
- ・規模拡大に向けて農地の目処がついたため、早期に認定農業者に移行し、スーパーL資金等を活用して16aの増設を計画中。

今後の目標 (就農5年後)

- ・イチゴ74a (高設)
- ・法人化し、人材が通年雇用できる環境を整え経営の安定化を図る。
- ・環境モニタリングに基づく制御等を行うこと等により、単収・品質の向上を図り、農業収入1億円を目指す。

畑 篤志さん (26歳)

(営農類型：果樹)

新規就農を志した経緯・背景

子供のころから親の柑橘栽培を見たり、手伝いながら育ってきました。代々続く農業経営を継承することを考え、国立研究開発法人 農研機構果樹茶業研究部門興津カンキツ研究拠点で常緑果樹について学びました。令和元年から親の経営に従事し、令和4年に経営を継承して、経営管理の合理化と規模拡大等を進めるため農業法人を設立しました。

導入した機械・施設等

パイプハウス3棟12a
(無加温)



初期投資を行う上で留意したポイント

- 農業経営を安定させるため、現在栽培している露地柑橘と収穫時期が異なり、高単価で販売できる無加温レモン栽培に取り組むこととした。
- 施設による早出しレモンの収益と、施設整備にかかる費用対効果を十分に検討した。

導入の効果

- ハウス栽培によって労力分散が可能となり、経営の安定が見込める。
- ハウス栽培では、レモンに多いかいよう病の発生が抑えられ、また、露地栽培と比較すると、出荷時期が早く高単価が期待できる。

就農の状況と今後

就農準備 (H29~30)

- 農研機構果樹茶業研究部門興津カンキツ研究拠点で、柑橘の栽培に関する技術を取得。
- 大型特殊、フォークリフト、バックホー、毒劇物取扱いの免許取得。

現在 (経営継承2年目)

温州みかん155a
中晩柑129a
施設レモン12a

- 経営発展支援事業を利用し、ハウス3棟を新設、レモン栽培を開始。
- 農業収入は約1300万円。

今後の目標 (経営継承5年後)

温州みかん175a
中晩柑130a
施設レモン12a

- 規模拡大(約1.1倍)を行い、所得向上を図る。
- 作業の効率化、栽培スキルの向上を図る。
- 農業収入は約1650万円。